

小坂子油田 I・II 遺跡

公共開発（ふるさと農道緊急整備事業）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

前橋市は、関東平野の北西に見事な裾野をひいてそびえる赤城山の南側を市域とし、坂東太郎で知られる利根川が貫流する豊かな水に潤され、自然の風光、四季おりおりの変化に恵まれた山紫水明の地であります。

古代文化の栄えたこの地は、今から3万年も前の旧石器時代から人々が生活してきました。古墳時代には、古墳文化の中心地として栄え、市内には800基を超す古墳の数が記録されています。今は、土地の開発などでその数も残り少なくなっていますが、大切に保存が進められています。

奈良・平安時代には、上野国府が元総社町に置かれ、近世には江戸幕府の重鎮の酒井氏・松平氏などの居城が置かれるなど、政治・経済・文化の中心地として発展してきました。

今、県都前橋は、28万余の人口を擁し、生涯学習・教育文化・商工農業の調和のとれた“詩情豊かな前橋”安全で住みやすい「街づくり」を進めています。

赤城山南麓の農業は、利根川水系の恵まれた水利を活用しての営農と共に、土地基盤の整備・農業施設の近代化を図り、都市化の進展に対応した近代農業推進の一貫として、地域集落間と公共施設等を結ぶ基幹的道路（ふるさと農道）の建設が進められています。

小坂子油田I・II遺跡は“ふるさと農道緊急整備事業”的実施に伴って発掘調査したものであります。

調査では、縄文時代前期から中期頃までの土器や陥し穴3基をはじめ、古墳3基と小石碑1基、奈良・平安時代の溝1条なども検出されました。さらに古墳からの出土遺物の中には、鉄製の鉗や二叉鉗のような出土例の少ない貴重な物が検出されています。また、1号古墳は、上毛古墳綜覧の「芳賀村第四ニ號墳」に相当すると思われ、2・3号古墳は同書に記載されていないものであり、新たにこの地域の歴史を解明する貴重な資料を得ることができました。

この調査報告書を刊行するにあたり、前橋市農村整備課をはじめ多くの関係各機関の方々、地元の方々の御理解と御協力を得たことに対し深甚なる感謝を申し上げます。

平成9年3月31日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 中 西 誠 一

例　　言

- 1 本報告書は、平成8年度公共開発（ふるさと農道緊急整備事業）に伴う小坂子油田I・II遺跡発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地 群馬県前橋市小坂子町1252-7番地外（I）、1252-2番地外（II）
- 3 調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長 中西誠一）の指導のもとに、前橋市農政部農村整備課の委託を受け、スナガ環境測設株式会社（代表取締役 須永眞弘）が実施した。
- 調査担当者 井野誠一・飯塚 誠（前橋市埋蔵文化財発掘調査団）
荻野博巳（スナガ環境測設株式会社）
- 4 発掘調査期間 平成8年11月21日～平成9年1月31日（I・II）
整理期間 平成9年2月1日～平成9年3月31日
- 5 調査面積 油田I…2204.83m²、油田II…2577.14m²、合計4781.97m²
- 6 出土遺物は前橋市教育委員会が保管する。
- 7 測量・調査計画…須永眞弘、調査担当…荻野博巳、調査員…新保一美、測量・実測…板垣宏・勝田貞幸・佐々木智恵子、写真撮影…荻野博巳、安全管理…都丸保男、作業事務…柴崎信江が担当した。
- 8 本書は、調査団の指導のもと、スナガ環境測設株式会社が作成に当たり、原稿執筆を荻野博巳、編集…須永眞弘、校正…金子正人・新保一美、実測図の整理他…板垣宏、遺物洗浄・注記・復元…新保一美・柴崎信江・都丸保男、遺物実測…佐々木智恵子、文章の清書…勝田貞幸、内業事務…須永豊が担当した。
- 9 発掘調査に参加した方々（順不同）

石川サワ子 内山恵美子 山崎勘治 中野鶴一 飯島いし 小沼あき 新保勝太郎 齋藤まさ子
新保松乃 高坂やすの 高坂なみ 内田三郎 内山貞夫 関根時太 青木もと代 三俣光江
布川幸子 中島玉恵 佐藤久美子

凡　　例

- 1 本遺跡の略称は 8C10である。
- 2 遺構名・略称 古墳…M 溝…W 陥し穴…D 風倒木…O 石…S
- 3 実測図の縮尺 遺跡全体平面図1/400 古墳1/40, 1/60, 1/80, 1/160 石室展開図 1/40
遺物接合図1/60, 1/80 小石櫛1/40 陥し穴1/60 溝跡・風倒木跡1/60, 1/400 遺物1/2, 1/3, 1/4
- 4挿入図は、国土地理院発行の5万分の1「前橋」を使用した。
- 5 遺跡の位置の基準 国土地理院三角点及び水準点を照合済。
- 基準点 A-0 地点 第IX系座標値 X48180.000m Y-63520.000m
水準点 BM. 1…238.500m, BM. 2…241.000m, BM. 3…241.000m 等高線20cm グリッド4m間隔
- 6 土層断面の土色名及び土器類の色調名は『新版標準土色帖』（農林省農林水産技術会議事務局 監修 財团法人 日本色彩研究所色票監修）による。
- 7 土附注記及び本文中には As：浅間山の略称を使用した。
- 8 断面図の地山部分……圖、石室の裏込め部分……図、須恵器の断面図……圖を使用。
- 9 遺構の面積は、平面図による座標面積計算により算出した。

目 次

序例	言 例	
凡		
目	次	
I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の位置と歴史的環境	1
1.	遺跡の立地	1
2.	歴史的環境	1
III	調査の経過	4
1.	調査方針	4
2.	調査経過	4
IV	層 序	4
V	遺構と遺物	5
1.	概 観	5
2.	縄文時代	5
(1)	陥し穴	5
3.	古墳時代	6
(1)	古 墳	6
(2)	小 石 棚	8
4.	奈良・平安時代	9
(1)	溝 跡	9
5.	その他の遺構	9
(1)	風倒木跡	9
VI	成果と考察	9
	古墳について	9

挿 図

第1図	周辺遺跡図	2	第11図	2号古墳石室展開図	18
第2図	小坂子油田I・II遺跡位置図	3	第12図	3号古墳実測図	19
第3図	発掘調査経過図	4	第13図	3号古墳石室展開図・遺物接合図	20
第4図	基本土層図	4	第14図	1～3号陥し穴・小石棚実測図	
第5図	遺跡周囲の古墳分布図	10		小石棚展開図	21
第6図	各副葬品の寸法凡例	12	第15図	1号溝・風倒木跡断面図	22
第7図	1号古墳実測図	13-14	第16図	古墳時代の遺物（1）	23
第8図	1号古墳石室平面・断面・展開図	15	第17図	古墳時代の遺物（2）	24
第9図	2号古墳実測図	16	第18図	小坂子油田I・II遺跡全体平面図	25-26
第10図	2号古墳石室断面図・遺物接合図	17			

表

副葬品計測表	11	出土遺物観察表	12
--------	----	---------	----

写 真 図 版

図版1	調査前現況、調査区II試掘トレンチ・サブトレンチ全量、1～3号陥し穴、1号古墳全景、1号古墳石室全景	
図版2	1号古墳石室、2号古墳全景、2号古墳石室全景	
図版3	2号古墳石室・前庭部遺物出土状況、3号古墳全景、3号古墳石室	
図版4	3号古墳石室・遺物出土状況、小石棚、1号溝、風倒木跡全景	
図版5	古墳時代の遺物（M-1～3）	
図版6	古墳時代の遺物（M-2～3）・その他の遺物	

I 調査に至る経緯

“ふるさと農道緊急整備事業”の実施に伴い、前橋市農村整備課より埋蔵文化財についての照会があり、前橋市教育委員会文化財保護課では協議検討を行い、道路建設用地内にトレンチによる試掘調査を行ったところ、上毛古墳縦観に記載される「芳賀村第四ニ号墳」に相当すると思われる古墳の存在が明らかになった。当局と協議の上、上記道路用地の全面の発掘調査を実施し、記録保存をすることとなった(小坂子油山I遺跡)。また農道建設に伴って南北両側に隣接する畑地についても施工基面(Foundation Level)で現地盤を削平することが明らかになつたことから急掘協議の上、併せて試掘調査を行うこととなり、その結果、古墳の存在が認められたため、道路用地部分に引き続いて本調査を実施することとなった(小坂子油山II遺跡)。なお、事業地の北西・南西部は試掘調査時点では遺構が確認されなかつたため、調査範囲から除外した。

発掘調査は民間調査機関への委託により実施することとし、前橋市埋蔵文化財発掘調査団と民間調査機関(スナガ環境調査株式会社)及び前橋市農村整備課の三者での委託契約を締結し、発掘調査を行うこととした。

II 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の立地

小坂子油山I・II遺跡は、前橋市の中心市街地より北の赤城山に向かって直線距離にして約7kmの、小坂子町の四ツ塚・原之郷・前橋線の西側にある。

本遺跡は、赤城山南麓の南東に傾斜する台地上に立地し、標高241m前後で、西側は開拓谷を利用して水田になつていて、小河川も存在する。東側は侵食崖により標高差約10mの段差をもつて田畠が広がっている。北側には上毛三山の一つである赤城山が間近にそびえたち、西方には榛名山や浅間山の稜線も明瞭に望むことができる。

2. 歴史的環境

本遺跡(I)の所在する前橋市小坂子町は、昭和29年に前橋市に合併される以前は、和名類聚抄芳賀郷と言われる勢多郡芳賀村の一部であった。同村は旧荒砥村、柏川村、旧桂萱村に次いで、赤城山南麓における古墳の集中域の一つとされている。

ここで芳賀地区とその周辺の古墳を概観してみたい。

昭和50年に調査された芳賀西部工業団地遺跡(2)では、径約4～13mの前～中期の古墳31基が確認され、その主体部に箱式棺状石室や埴輪棺などを伴つたものも検出されている。また芳賀東部工業団地遺跡(3)の1号墳からは直刀・鉄鎌・耳環などの副葬品が検出されている。市指定史跡のオブ塚古墳(4)は旧芳賀村48号墳に相当し、前方後円墳で埴輪の配列が見られ、自然石の山石を積んだ横穴式石室を持つ。直刀・小刀・鉄鎌・耳環等を出土し、6世紀後半の築造と考えられている。大日塚古墳(5)は、明治38・39年に発掘され、鏡・鏡板・轡・刀身・鍔などが出土している。他にも旧芳賀村59号墳に相当する東古田古墳(6)は径約13mの円墳と思われる。また墳丘は既に削平されていて不明であるが、箱式棺状石室の主体部を持ったオブ塚西古墳(7)は6世紀中葉前後と推定される。桂正山稻荷塚古墳(8)も墳丘の大半が削平されていたものの、北東部に周塁が残り、両袖型で胴張りの傾向が見られる横穴式石室を持ち、玄室の入口部には櫛石が据えられていた。耳環・刀子・鉄鎌・鉄片が出土し、7世紀後半の構築といわれる。詳細は不明であるが、同一地番内に芳賀村29～38号墳に相当する古墳の存在する榎峰古墳

群(9)。7世紀墳の築造と思われ、原形を良くとどめている円墳の新田塚古墳(1)、石室は開口して貯蔵穴に利用されているが、原状をややとどめる円墳の(1)芳賀村49号墳(2)など数多く点在し、古墳時代において、この地域の繁栄の様子がうかがわれる。



第1図 周辺遺跡図



凡　例



油田 I 遺跡



油田 II 遺跡



試掘調査範囲

第2図 小坂子油田 I・II遺跡位置図

III 調査の経過

1. 調査方針

調査区の設定は、公共座標に基づき、東西方向に延びる調査区を算用数字で、南北方向に延びる調査区をアルファベットで呼称し、4m毎にグリッドを設定した。グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。また水準は、公共水準点に基づき調査区内に測設した。図面作成は、1/10、1/20、1/100の縮尺を使用し、作図を行った。遺物は遺構・グリッド単位で層位毎に収納し、遺物分布平面図、遺物台帳に記載し、付番処理して収納した。

また遺構・遺物等の写真撮影（白黒・リバーサルフィルム）も行った。

2. 調査経過

平成8年11月21日より資材・重機類の搬入、休憩所・仮設トイレの設置を行った。市調査団の指導のもと、重機による表土掘削と並行して遺構確認面の精査を開始した。道路部分（I）より古墳1基・溝1条を検出した。その後、道路北・南側の畑地（II）についても試掘調査が必要となり実施した。その結果、古墳1基とIで確認した溝の続きなどを検出した。

また右の表と下記に月別の作業状況・経過を記載した。

平成8年11月… Iの表土掘削後、遺構確認により遺構分布範囲を特定し並行して試掘調査で確認できた2号古墳の範囲を拡張し、遺構確認を実施した。

12月… 1号古墳の周堀より発掘を開始し、石室内の精査も並行して作業を進めた。さらに各遺構の測量、写真撮影等を実施し、下旬に同古墳の調査を終了した。引き続き2号古墳の発掘に入り、同周堀の発掘中1号土坑を検出した。

平成9年1月… 2号古墳の石室の調査に入った。周堀精査中、小石棚と3号古墳周堀及び2号土坑を検出し、石室と残りの周堀を確認した。2号と並行して3号の調査を行い、多数の副葬品を検出した。また3号北側周堀内より3号土坑も検出した。発掘とほぼ同時進行で測量・写真撮影を行い、1月31日に作業を終了した。

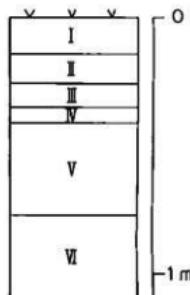
調査区	I	II
月日		
平成8年 11月		
12月	■	■
平成9年 1月	■	■
2月	■	
3月	■	

■ 表土掘削・プラン確認
■ 遺構掘り下げ・測量
■ 仕上げ・全体写真撮影
■ 整理作業（I・II）

第3図 発掘調査経過図

IV 層序

- I 灰褐色土層 粘性なし・締まりややあり（耕作土）
- II 褐灰色土層 粘性・締まりややあり粗砂を含む
- III 暗褐色土層 粘性ややあり・締まりあり As-B軽石を70%以上含み、As-B灰層を所々に含む
- IV 黒色土層 粘性ややあり・締まりあり As-C軽石 ϕ 2~3 mmを5~10%含み、細砂も含む
- V 黄褐色土層 ソフトローム（砂質） 黄色軽石と白色軽石をわずかに含む
- VI 明黄褐色土層 ハードローム



第4図 基本土層図

V 遺構と遺物

1. 概観

縄文時代の陥し穴3基、古墳3基、小石櫛1基、奈良・平安時代の溝跡1条の他に、風倒木跡1か所が検出された。また確認面やサブトレンド内から、縄文前期～中期頃までの土器片や石器類が多数検出されたが、他の遺構等は検出されなかった。

2. 縄文時代

(1) 陥し穴

D-1 (第9・14・18図、図版1)

位置 調査区IIの2号古墳北東側周縁内。

方向 長軸方向 N-3°-W

形状 南北に長い楕円形を呈し、中央部分でやや内側にくびれている。

規模 径184×57cm、底径148×33cm、確認面からの深さ104cmを測る。

備考 周縁によって上端は掘り込まれていた。底には逆茂木跡と思われる穴が3か所検出された。寸法・形状は、北が径10×10cm深さ46cmの円形、中央が径11×9cm深さ48cmの楕円形、南が径10×9cm深さ47cmの不整形な円である。

遺物 検出されなかった。

D-2 (第12・14・18図、図版1)

位置 調査区IIの3号古墳西側周縁内。

方向 長軸方向 N-46°-W

形状 南東から北西に長い楕円形を呈し、中央部分でやや内側にくびれている。

規模 径(193)×88cm、底径142×48cm、確認面からの深さは105cmを測る。

備考 周縁によって上端は掘り込まれていた。底には逆茂木跡と思われる穴が2か所検出された。寸法・形状は、西の穴が径13×8cm深さ55cmの不整形な円、東が径12×8cm深さ55cmの楕円形である。

遺物 平行沈線による区画帯に連続刺突文を施す縄文前期の土器片が検出された。

D-3 (第12・14・18図、図版1)

位置 調査区IIの3号古墳北側周縁内。

方向 長軸方向 N-10°-W

形状 ほぼ南北に長い楕円形を呈し、中央部分でやや内側にくびれている。北西・北東・南西隅に奥行き14～22cmの掘り込みが見られた。

規模 径203×112cm、底径178×70cm、確認面からの深さは105cmを測る。

備考 周縁によって上端は掘り込まれている。底には逆茂木跡が2か所検出された。寸法・形状は、北の穴が径13×12cm深さ30cmの円形、南が径12×9cm深さ33cmの楕円形である。

遺物 検出されなかった。

陥し穴について 今回検出した陥し穴3基はすべて古墳の周囲内に検出され、周囲によってその上端を切られていた。3基についてまとめると、D-1とD-2との間隔は南北方向で24m、D-1とD-3が20m、D-2とD-3は東西方向で10mの位置にあり、確認面の標高は239.20～240.70mの範囲にあり、ほぼ等高線に沿ったライン上に掘られているものと思われる。さらにそれぞれの主軸方向がやや西に傾くことから、傾斜に対して直角方向に構築されていることがうかがわれる。また、底面におけるピット（逆茂木跡）の数は、2個と3個の物があり、D-1は底面中央に直線状に3個並び、D-2・3は西壁寄りに2個並んでいる。いずれも完全な形での検出ではないが、形状や規模、等高線に沿っての構築状況などの共通性が認められる。

3. 古墳時代

(1) 古 墳

1号古墳（第7・8・18図、図版1・2）

位 置 調査区I-IIにまたがり、南東寄りに位置する。標高は237.40～239.80mを測る。

墳 丘 既に削平されているが、北西から南東にかけて傾斜が見られ、As-C軽石を含む黒色土層を基盤とし、その上に盛土をして墳丘の高まりを作り出したと思われる。

周 堀 全体に丸みを持ったカーブを描きながら南西部分の途切れを除いて、ほぼ一周する円墳である。西側の周堀とW-1が重複し、北と南側の周堀壁の一部を壊し、周堀の西縁にW-1が作られている。

規 模 周堀外側で東西長32.4m、南北長34.0mを測り、周堀上幅は2.5～7.8m・下幅0.8～3.1m・深さは確認面から0.40～1.57mを測る。幅は一定しておらず、北西・東側が幅広く、北東側で狭くなっている。また北西から東側にかけて深く、南側に向かって浅くなる。

主体部 南方向N-175°-Wに開口する横穴式石室である。石室は、古墳のほぼ中央に、古墳構築時の削平面であるAs-C軽石を含む黒色土や、ローム層を竪穴状に掘り込んで作られている。掘り込み寸法は南北方向幅7.76m、東西方向幅3.5～4.9m、深さ0.30～0.85mを測る。石室の天井石は失われているが、羨道と玄室に区分されている。石室羨門には前庭部が付設され、羨門袖壁の石積みは輝石安山岩の加工石を境にして右側が長さ1.6m程で1段残り、中央は閉塞石が4石残る。羨道部分に残存している石はなく、根石跡が右側壁7石、左側壁に10行程確認された。袖石は抜かれている。(石室部分からは石を割る時に使用したと思われる盤^{いわせ}が1本検出されている。材質は鉄製で新しいものと思われる。)

玄室の側壁は30～80cmの石と小石で2段程残り、根石は掘り方の底面に大きい石を配置し、平らな面を石室内側に揃えて直接置かれている。床は底面を整地した上に、10～40cmほどの割れ石と玉石を敷き作られている。さらに中央やや北寄りには、輝石安山岩の加工石6個（長さ28～42cm・幅18～27cm）を使用して、玄室を分ける間仕切石が検出された。また間仕切の石列には、それを支えるための挟み石の使用も見られた。また玄門と思われる場所より50cm程北側の床面に、径32×21cmの石（第8図参照=点描）が15cmの深さで埋め込まれていた。石室平面形のはば中央にあたり、敷石のなかでこの一石が特に深く埋めてあったが、その理由は判然としない。裏込めは、壁石裏側に80～110cm幅で、こぶし大の石や小砾・砂を入れて内部の壁石を補強し、外側は人頭大の石を積んで崩壊を防いでいる。また玄室の平面形は羨道部の根石跡や側壁などから推測して両袖形で剥張りの傾向が見られる。石室各部の計測値は、石室長6.18m・玄室長2.93m・玄室奥幅1.64m・玄室前幅1.78m・羨道長3.25m・羨道幅(0.8)～(1.0)mを測る。

遺 物 石室から鉄錆片、周堀内から敲き目痕の見られる須恵器甕片等が検出されたが、尖潤に耐える物ではな

い。

備考 石室に加工石を使用し、間仕切石として利用している例は、高崎市の觀音塚古墳がある。5面削りで浮石質角閃石安山岩を使用したもので、6世紀末～7世紀初頭の構築とされる前方後円墳である。

2号古墳（第9・10・11・18図、図版2・3）

位置 調査区IIの北側に位置する。標高は240.20～241.40mを測る。

墳丘 既に削平されているが北西から南東にかけて傾斜が見られ、1号古墳と同じくAs-C軽石を含む黒色土層を基盤とした上に盛土を施し、墳丘を作ったと思われる。

周塁 北側と南側が幅広く途切れ、その東側と西側に周塁を持つ円墳である。東側は北から南に向かって弧を描き、北側から中央付近にかけて幅が広く深い。また北側でD-1と重複している。西側は全体的に緩やかな弧を描いて南東方向にカーブし、北側が深く南側が浅くなる。また西側の周塁とW-1が重複し、周塁の北と南側壁の一部を残してW-1が作られている。

規模 東西長23.0m・南北長18.1mで、東側の周塁で上幅1.9～5.7m・下幅1.3～2.6m・深さ0.66～1.33mを測り、西側で上幅1.5～4.1m・下幅0.7～2.0m・深さ0.28～0.46mを測る。幅は東・西側共に一定しておらず、特に東側は幅広く深い。

主体部 南東方向N-165°-Eに開口する横穴式石室である。石室は、1号古墳と同じく、古墳構築時の削平面であるAs-C軽石を含む黒色土層や、ローム層を竪穴状に掘り込んで、古墳の中心から南東方向に作られている。掘り込みの寸法は、北西から南東方向に幅6.6m、北東から南西幅3.2～4.75mの範囲で深さ0.40～0.72mを測る。石室の天井石は失われているが、前庭部・狭道・玄室に区分される。石室狭門には前庭部が付設され、こぶし大の石が崩れ落ちていた。狭門袖壁は右側の石積みが残り、それにつながる側壁列がハの字に開いて、東側2.0m、西側2.2mの長さで1～2段程の石列が残る。また狭門には比較的平らな石を2段重ねた閉塞の石積みが残っていた。狭道部分は東壁石が1～2段積みで2～3石程残り、西壁側は石がなく、根石列跡が4か所検出された。また狭道部には自然石の散石の一部が残っていた。

玄室内の玄門、側壁、奥壁等の石は抜かれていて根石列の跡が検出されている。また玄室と狭道を区分する所には袖石のものと思われる根石跡があり、右側は床面より深さ40cm、左側は深さ15cm程の跡が残り、玄門が立っていたことが推定される。また側壁の根石跡は東側が7石、西側が6～7石検出され、奥壁は大小7石程検出した。西壁と奥壁には、比較的大きい石の使用跡が見られた。床面は全体を10～30cm程の平らな割れ石で敷石とし、狭道部の石との使い分けが見られる。裏込めは、壁石裏側に80～120cm程の幅に、こぶし大の石と小礫・砂を入れて壁石を補強し、外側は人頭大の石を積んで崩落を防いでいる。また玄室の平面形は根石跡などから判断して両袖形と思われる。石室各部の計測値は、石室長(4.95)m・玄室長(2.25)m・玄室奥幅1.70m・玄室前幅1.40m・狭道長2.70m・狭道幅0.78～(0.84)mを測る。

遺物 石室内から大刀1口（西側壁際に小石を敷いた上に乗った状態で検出）・鉄鏃7点・刀子1点・前庭部の崩落石の間から土師器坏2点や周塁内から蔽き目痕の見られる須恵器大甕片16点などを検出している。大刀は鉄製の直刃で、長方形の6窓を穿つ鏃と、刀装具が装着された状態で出土している。

備考 2号古墳前庭部から検出された土師器坏（遺物番号35）と、3号古墳の西側周塁内から検出された坏の破片とが接合されたが、3号古墳石室から出土した土師器坏が、2号古墳のそれより古い鬼高末期の様

相を呈している点から、3号古墳が古いと考えられ、周囲から出土した坏片は、2号古墳との位置関係を考慮すると流れ込んだものと思われる。

3号古墳（第12・13・18図、図版3・4）

- 位 置** 調査区IIの中央東寄りで1・2号古墳の間に位置する。標高は238.60～240.00mを測る。
- 墳 丘** 既に削平されている。1・2号古墳と同じく、As-C軽石を含む黒色土層を基盤とした上に盛土をして墳丘を作ったと思われる。また石室のローム面までの掘り込みは、1・2号古墳よりやや浅い。
- 周 堀** 北東側と前部が途切れる。周堀は大きく弧を描いて西側から北側にカーブするものと、北東から南東方向に直線気味に作られているものとで構成され、円墳と思われる。全体に幅広く西側は深い。また西から北側にかけて掘られた周堀内でD-2・3と重複している。
- 規 模** 東西長17.6m・南北長13.9mで、周堀の東側で上幅2.5～4.6m・下幅1.0～3.4m・深さ0.49～1.05mを測り、西・北側で上幅2.0～4.5m・下幅1.5～3.3m・深さ0.52～0.88mを測る。1・2号古墳の周堀よりも小さいが、石室を中心として見た周堀の形状や幅が安定し、他の周堀に比べ底面の凹凸が少なく、整った形状をしている。
- 主体部** 南西方向N-150°-Wに開口する横穴式石室である。石室は、古墳構築時の削平面であるAs-C軽石を含む黒色土層や、ローム層を窓穴状に中心より南西方向に掘り込んで作られている。掘り込み寸法は、北東から南西方向に幅5.6m、北西から南東方向に幅2.84～3.46mの範囲で、深さ0.30～0.65mを測る。また石室の天井石は失われているが、羨道・玄室に区分される。羨門には袖賺の石が左右にあり、右側は1石、左側は2石残り、中央には閉塞石が4石残る。羨道部は東側壁が1段で4石、西側壁は1段で6石残り、東側には2石の根石跡も検出された。羨道の床には敷石は残っていないかった。玄室の側壁・奥壁等の石は抜かれていって、玄門に積石と両袖石が残る。さらに玄室の範囲を示す12～30cm程の石列が、ほぼ直線に並ぶ様子が半面上で推測できる程度である。また根石跡などは、はっきり検出できなかった。床面の敷石には割れ石が使用されている。裏込めは内側にやや崩れた状況が見られ、壁側は10～20cm、外側は20～40cm程の石が使用されている。石室各部の計測値は、石室長(4.40)m・玄室長(2.00)m・玄室奥幅(1.54)m・玄室前幅(1.14)m・羨道長2.40m・羨道幅0.70～0.86mを測る。
- 遺 物** 玄室内西壁側から鉄鋸と二叉鋸の一部、玄室西壁から刀片1点（2号古墳の大刀とほぼ同じ形状と思われる）、鐵鋸10点以上、中央付近から勾玉1点・小玉6点・切子玉3点・耳環3対（6点）、奥壁寄りに土師器坏2点（合子状）と、北側の周堀内から土師器环2点が完形で検出された。

（2）小石櫛（第14・18図、図版4）

- 位 置** 調査区IIの2号古墳東側周堀と、3号古墳の北側周堀の間に位置する。
- 規 模** 外径135×80cm、内径92×35cm、深さ30～40cmを測る。
- 備 考** 石櫛は、N-3°-Eを主軸として、ローム土層を掘り込んで作られている。側壁は短辺で北側が1段積の1石、南側が2段積で3石が見られた。使用石の大きさは幅25～30cm、厚さ13～30cmを測る。側壁の長辺は、東側は1段と2段の積み重ねが見られる。西側は2段積であった。使用石の大きさは、幅15～30cm・厚さ11～30cmを使用して作られており規模は小さい。また、床には15～30cm程の扁平な安山岩の川原石が敷ききめられていた。
- 遺 物** 検出されなかった。

4. 奈良・平安時代

(1) 溝 跡

1号溝 (第15・18図、図版4)

位 置 調査区1・1にまたがり、中央やや東寄り。1・2号古墳の西側周囲と重複する。

規 模 確認長76m、上幅80~200cm、下幅35~90cm、深さ15~45cmを測る。

備 考 確認面にAs-B層の堆積が認められた。また1・2号古墳の周囲と重複するところは、他よりも幅が広くなっている。底面の標高は北側が241.33m、南側237.83m、北から南へ約4.6/100の勾配を持つ。

遺 物 確認面で平底傾向の強い土師器環片が検出されているが、小片であり実測に耐える物ではない。

5. その他の遺構

(1) 風倒木跡 (第15・18図、図版4)

位 置 調査区1の中央西寄りに位置する。

形 状 東西方向に長い梢円形を呈する。

規 模 径270×200cm、深さは東側が浅く10cm、西側で60cmを測る。

VI 成果と考察

古墳について

今回の調査では、旧芳賀村第42号墳と、新たに検出した2基を含めて計3基の古墳調査を実施した。古墳の大部分は既に開墾され、畑地として耕作されており、古墳の形跡をわずかに残していたものは、上毛古墳綜覧に記載されている旧芳賀村第42号墳(M-1)のみで、他の2基は今回の調査によって検出したものである。

調査により検出した古墳は、周囲を伴う横穴式古墳で、すべて円墳と思われる。その特徴を挙げると、

①1~3号古墳は両袖式の石室を持つと思われる。

②1号古墳石室には、輝石安山岩の加工石が使用され、羨門袖壁に1石、玄室中央の間仕切石列に6石使用され、玄室内を前と奥の二部に分ける石に使用されている。

③2号古墳は羨門袖壁につながる側壁列の石積みが残っている。

④3号古墳の玄門には両袖石に挟まれた三角形の大きい櫛石^{くしきいし}が置かれていた。

⑤1~3号古墳とともに鉄錆が出土している。特に2・3号古墳からは鉄製の大刀や鉢・二叉鉢・鐵錆などの多くの遺物が出土している。さらに3号古墳からは勾玉や切子玉・小玉・耳環などの副葬品が多く検出されている。

⑥3号古墳の出土遺物、耳環3対(6点)から見て、複数の埋葬が考えられる。

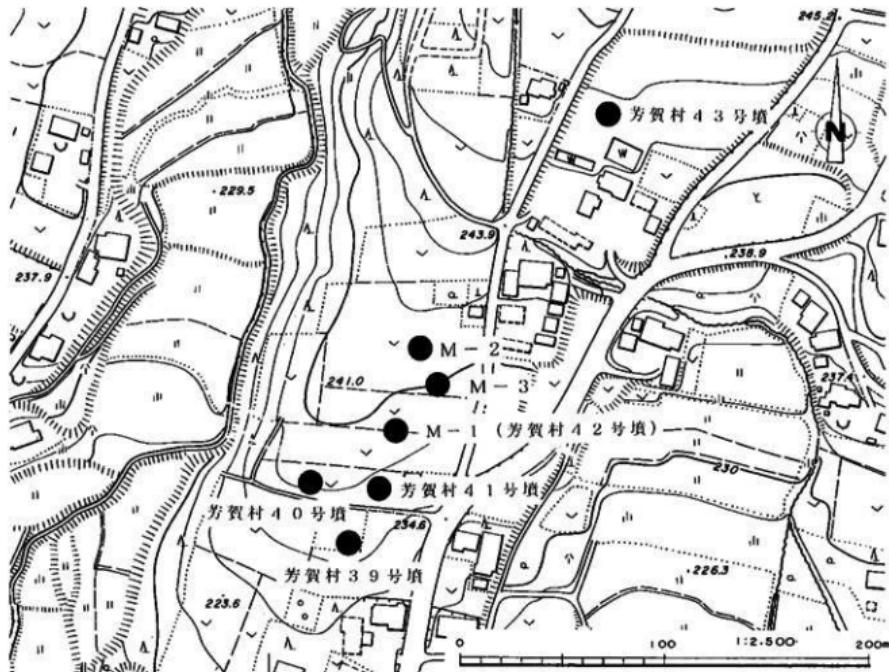
⑦1~3号古墳の出土遺物からは、埴輪の検出がないことや、検出された須恵器大甕片や土師器环などの形状から、いずれも7世紀後半以降の古墳と思われる。

⑧1~3号古墳の玄室床面は、敷石として平らな割れ石の使用が見られる。

⑨2号・3号古墳の使用時期は、2号古墳前庭部より検出の土師器环(遺物番号36)と3号古墳西側周囲内に検出された土師器环片(2号古墳前庭部検出の土師器环片と接合した物=遺物番号35)と、3号古墳北側周囲内検出の土師器环2点(遺物番号40・41)とは同時期(8世紀初頭)の特徴が見られることや、3号古墳石室内から検出した环2点(合子状で検出=遺物番号37・38)は鬼高終末期と思われることから、3号古墳は、2号古墳よ

り早い時期の構築が考えられ、2号古墳とほぼ同時期までの使用が考えられる。

これらのことから、本古墳の構築時期は、出土遺物からみて3号古墳が最も古いと思われる。また全体に緩やかな傾斜地に、基盤層からローム面までの掘り込みによって石室を作り、加工石の使用もわずかで、石積みの方法も巨石をあまり使用せずに、自然石の乱石積みによるもので、高度の技術や、大労働力を使わずに構築した古墳と思われる。さらに上毛古墳綜覧によると、旧芳賀村42号墳の周りには旧芳賀村39・40・41・43号墳の存在も確認されており、今回検出した2・3号古墳も川芳賀村の古墳群を形成した1つと考えられる。



第5図 遺跡周辺の古墳分布図

参考文献

- 芳賀団地遺跡群第1巻 1984.3 芳賀東部団地遺跡I（古墳～平安時代編その1） 前橋市教育委員会
横浜遺跡群 IV 1992 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
駒越芝山遺跡 1996 群馬県勢多郡大胡町教育委員会
奥原古墳群 1983 群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
琢掘り古墳群 1980 群馬県教育委員会
八幡遺跡 1989 高崎市文化財調査報告書 第91集 高崎市教育委員会
研究紀要10 1992.11 財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
群馬県史 資料編3 原始古代3 古墳
日本考古学用語辞典 齋藤忠 著 学生社
日本の考古学V 古墳時代 下 近藤義郎・藤沢長治 編
群馬の考古学 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
古墳時代の研究 II 地域の古墳II 東日本
前橋の文化財 前橋市教育委員会
芳賀の発掘〈写真集〉昭和56年 前橋市文化財研究会 発行
群馬県遺跡台帳 I (東毛編) 群馬県文化財保護協会
角川日本地名大辞典 10 群馬県 角川書店

副葬品計測表

鉄製品

単位(cm)

遺物番号	出土位置	名 称	全 長		鐵 身 部			寬 被 部			基 部			残存状態・備考
			a	b	c	d	e	f	g	h	i	j		
1 M-1	鉄 箔	—	—	—	—	—	—	—	—	4.3	0.4	0.3		
2 M-2	#	(4.3)	(4.3)	(2.4)	0.2	—	—	—	—	—	—	—	短束広根丸造頭快三角形式	
3 #	#	6.2	4.6	1.9	0.2	(2.5)	0.6	0.1	—	—	—	—	短束広根丸造頭快三角形式	
4 #	#	(4.7)	(4.7)	1.8	(0.2)	—	—	(0.1)	—	—	—	—	短束広根丸造頭快三角形式	
5 #	#	(13.8)	2.7	0.6	0.2	7.1	0.4	0.2	(4.0)	(0.4)	(0.3)	有茎鍼尾被片圓切刃箭式		
6 #	#	15.1	2.5	0.6	0.2	7.3	0.6	0.3	—	5.3	0.4	0.4	有茎鍼尾被端片刃箭式	
7 #	#	(11.1)	(1.2)	0.8	0.1	(6.1)	0.3	0.4	(3.8)	0.3	0.3	—	有茎鍼尾被端片刃箭式	
8 #	#	(9.7)	—	—	—	(4.6)	0.4	0.4	5.1	0.3	0.3	—	有茎鍼尾被	
9 M-3	#	(13.4)	1.8	0.7	0.2	(7.8)	0.6	0.2	(3.8)	0.4	0.3	—	有茎鍼尾被端片刃箭式	
10 #	#	(11.1)	2.2	0.7	0.2	(6.9)	0.6	0.3	2.0	0.3	0.25	—	有茎鍼尾被端片刃箭式	
11 #	#	(10.9)	1.7	0.65	0.3	(8.3)	0.7	0.3	(0.9)	0.5	0.4	—	有茎鍼尾被端片刃箭式	
12 M-1	釘か	長さ2.1 幅0.2 厚0.3												
13 M-2	刀 子	全長(8.3) 刃長(2.1) 刃幅(0.6) 基厚(0.7) 基厚(0.4)											鍔か	
14 #	刀 子	全長(13.5) 刃部長(9.9) 刃幅(0.9) 柄厚(0.3) 基長(3.6) 基厚(0.7) 基厚(0.2)											僅かに間の形態をとる	
15 M-3	刀片	全長(4.4) 刃幅(1.6) 柄厚(0.4)												

番号	位置	名 称	全 長		刃 部		基 部		目釘穴		刃 缘		残存状態	備 考
			a	b	c	d	e	f	g	h				
16 M-2	直 刀	82.0	70.0	12.0	—	1個	3.20	—	茎へ鋒の部分	—	—	—	鍔・鍔2個・茎金具の一部2個	
17 M-3	鍔	全長(13.7) 徳長(7.2) 徳幅2.6 徳厚0.6 袋錐長6.5 袋錐径2.0×1.8 目釘穴1個 目釘1.0×0.3							袋錐～徳部の一部	—	扁平菱形の底を持ち袋錐は平板から織り出して作りあげたもの。目釘片側残存。鍛造。			
18 M-3	二叉鉤	全長(11.7) 徳長(4.9) 徳幅(3.2) 徳厚0.8×0.6 袋錐径6.8 袋錐径2.2×2.1 目釘穴2個 目釘1.8×0.3, 1.6×0.3							袋錐～徳部の一部	—	鍛造による四角形の底座を二支持し袋錐を円錐に巻き出して密に合わせる。目釘左右完存。			

耳環

遺物番号	出土位置	名 称	外 径 (cm)		内 径 (cm)		断 面 (cm)		切込み幅 (cm)		重 量 (g)	備 考
			a	b	c	d	e	f	g	h		
19 M-3	H-環	2.05	1.90	1.30	1.15	0.80	0.40	0.30	8.53	鍍金複数		
20 #	#	2.00	1.90	1.20	1.10	0.70	0.40	0.20	9.41	鍍金		
21 #	#	2.00	1.80	1.10	1.00	0.70	0.40	0.20	7.80	鍍金		
22 #	#	1.90	1.90	1.10	1.00	0.70	0.40	0.10	7.31	鍍金		
23 #	#	1.80	1.60	1.10	1.00	0.70	0.40	0.40	5.53	鍍金 地金の内部まで剥離		
24 #	#	1.75	1.60	1.10	1.00	0.70	0.30	0.20	6.08	鍍金 地金まで剥離		

玉類

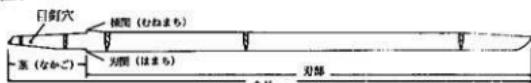
遺物番号	出土位置	名 称	計 測 値 (cm)						重 量 (g)	材 质	備 考
			a ₁	a ₂	b ₁	b ₂	c	d ₁	d ₂		
25 M-3	小 玉	0.90	0.70	1.10	0.80	1.10	0.30	0.30	1.98	滑石	
26 #	#	0.90	0.70	1.10	0.70	1.10	0.30	0.30	1.96	#	
27 #	#	0.85	0.80	0.90	0.60	0.90	0.30	0.25	1.33	#	
28 #	#	0.90	0.85	0.95	0.50	0.95	0.25	0.25	0.98	#	
29 #	#	0.75	0.75	1.10	0.70	1.00	0.30	0.30	1.04	#	
30 #	#	1.00	0.90	1.10	0.60	1.00	0.30	0.25	1.30	#	
31 #	切子玉	2.20	2.20	0.40	0.35	1.20	0.40	0.60	4.82	水晶	
32 #	#	2.10	2.10	0.50	0.60	1.30	0.25	0.20	4.84	#	
33 #	#	1.70	1.65	0.50	0.60	1.10	0.30	0.10	2.96	#	
番号	位置	名 称	a	b	c	d ₁	d ₂	重 量	材 质		備 考
34 M-3	勾 玉	3.00		1.60	0.80	0.15	0.25	5.56	瑪瑙		穿孔時に反対側が剥離

出土遺物観察表

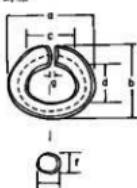
注：法量は①口径②底径③断面最大径④高さで表し、（）は推定値を示す。

番号	出土位置	器形(種)	法 量	①粘土②焼成④色調⑤残存	器 形・作 事 法 の 特 徴
35	M-2 前底部 東寄り	土師器 环	①17.6②9.3 ④5.3	①密。輝石・軽石・石英を含む ②良好③約7.5YR6/6④80%	大型で深い器形。口縁部は丸く内湾する。外面部口縁部横ナギ、体部へ低窪へラ削り。内面部ナギ。口縁外面1/2に黒色二次施釉あり。
36	M-2 前底部 東寄り	土師器 环	①11.2②8.1 ④3.6	①密。輝石・軽石を含む②良好 ③約7.5YR7/6④80%	腰やかに立ち上がる器形。外面部～体部へラ削り。口縁部横ナギ、内面部ナギ。
37	M-3 玄室内 東壁際	土師器 横撇坏	①10.4②6.8 ④3.3	①稠密。輝石・軽石を含む②良好 ③約7.5Y6/6④90%	浅い腰からやや聞き気味の口縁部を持つ。外面部口縁部横ナギ、体部から底部へラ削り。内面部ナギ。合子状の蓋として出土。底部全面墨色二次施成釉あり。
38	M-3 玄室内 東壁際	土師器 横撇坏	①11.2②8.4 ④3.0	①密。輝石・軽石を含む②良好 ③約7.5YR6/6④90%	形態的に腰から直角に立ち上がる！型。外面部口縁部横ナギ、体部から肩部へラ削り。内面部ナギ。合子の下部。外面部一部に墨灰色二次施成釉。内面部肌が見える。
39	M-3 前底部	須恵器 环	①10.0②6.7 ④3.0	①密。②良好③灰白10Y7/1 ④60%	水平な腰から内傾する口縁部を持つ。外面部口縁部クロク彫影、底部内持ちへラ削鑿。口縁部接合後、クロク彫影。内面部ロクロ彫影。
40	M-3 北側周 期内	土師器 环	①10.7②6.3 ④3.3	①稠密。輝石・軽石を含む②良好 ③約7.5YR6/6④98%	密度の高い胎土。口縁部を内湾する輪郭な作り。外面部口縁部横ナギ、筋部から底部はへラ削り。内面部ナギ。
41	M-3 北側周 期内	土師器 环	①10.6②(7.0) ④3.6	①稠密。輝石・石英を含む②良好 ③約7.5YR7/6④99%	密度の高い胎土。口縁部を内湾する輪郭な作り。外面部口縁部横ナギ、体部から底部はへラ削り。内面部ナギ。
42	M-3 前底部	須恵器 平瓶か	①(14.7) ④(6.1)	①密。粗粒白色軽石を含む ②良好③青5.5BCG/1④胸～底部	重心の低い安定した作り。底部に体部を作り足したもの。外面部口縁部クロク彫影後回転へラ削鑿。内面部ロクロ彫影。
43	M-3 前底部	須恵器 横撇口縁	①5.7②(5.0)	①稠密。白色軽石を含む②良好 ③灰白10Y7/1④口縁部のみ	口縁部ほぼ水平となる。別作りの口縁部を体部に付け足したもの。外面部ロクロ彫影。自然軸。内面部ロクロ彫影。

直刀



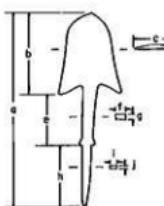
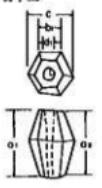
片端



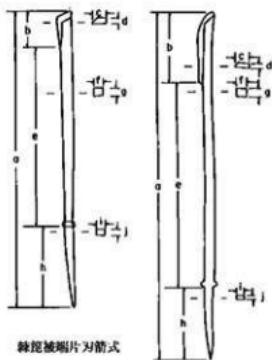
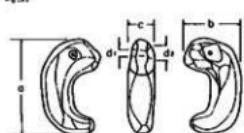
小玉



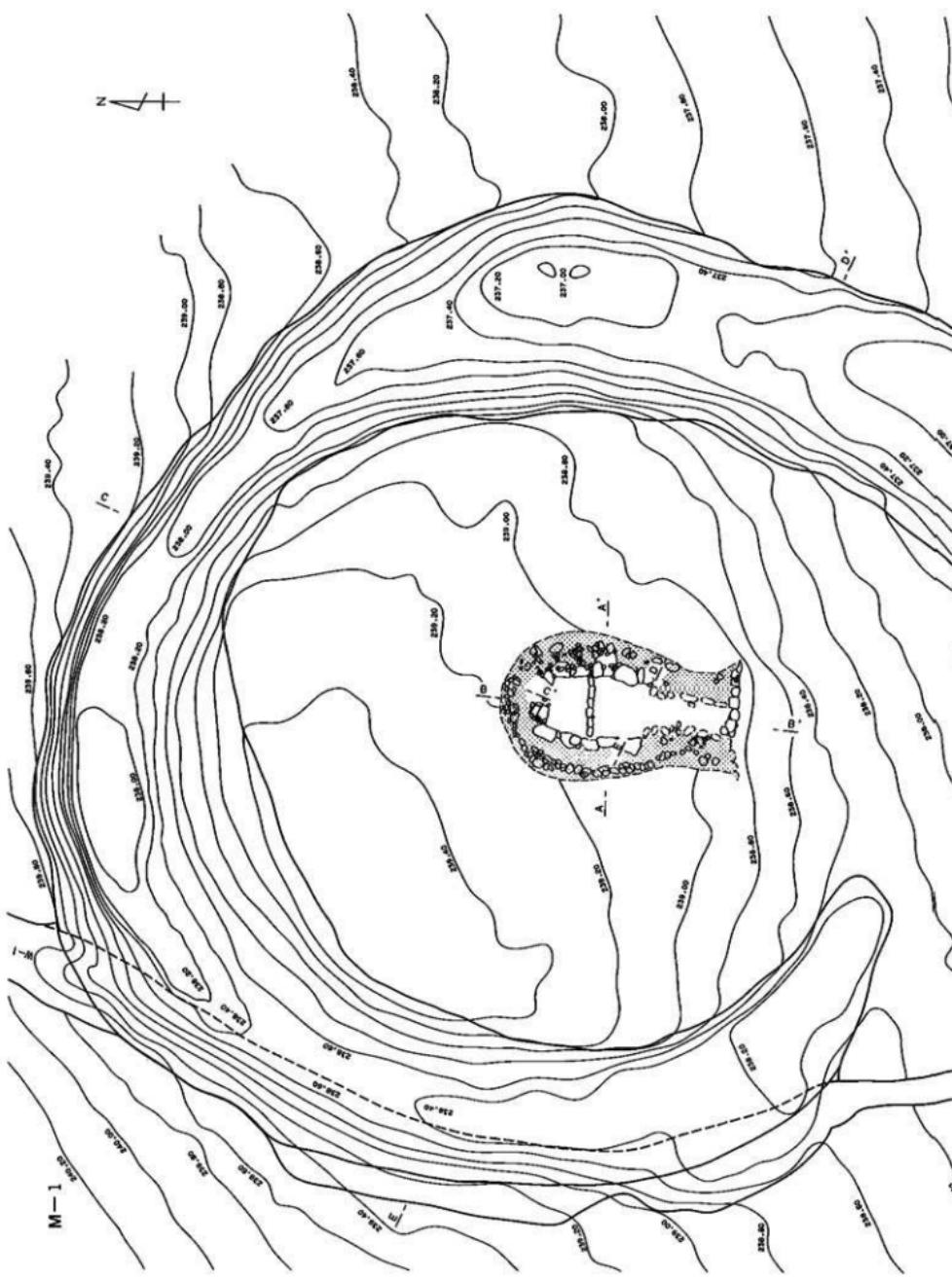
切子玉

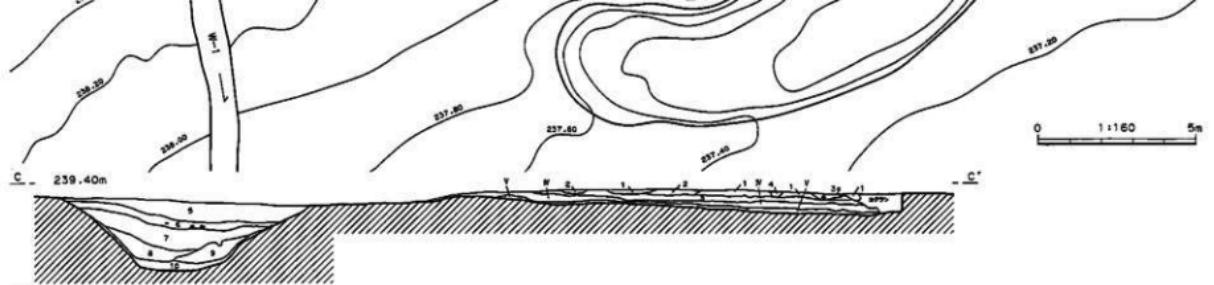


勾玉



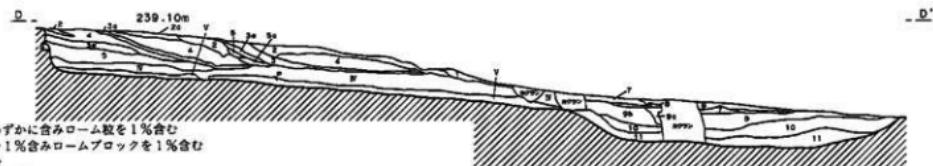
第6図 各副葬品の寸法凡例





M-I セクション (北側)

- 1 灰褐色土層 粘性ややあり・締まりあり As-C軽石1%とローム粒をわずかに含む
- 2 黄褐色土層 粘性・締まりややあり ロームを盛ったもの
- 3 黒褐色土層 粘性ややあり・締まりあり As-C軽石5%を含む
- 3a 3層にロームを含む
- 4 喜欽色土層 粘性・締まりあり 1層とロームの混土層
- 5 灰褐色土層 粘性なし・締まりややあり 細砂・軽石を含む
- 6 暗灰色土層 粘性なし・締まりあり As-B軽石とAs-C灰岩がブロック状に含まれる
- 7 黒褐色土層 粘性・締まりあり As-C軽石φ2~10mmを7%を含み下位はソフトロームがやや混じる
- 8 暗灰黄色土層 粘性ややあり・締まりあり As-C軽石φ1~3mmを3%含みソフトロームを10%含む
- 9 黄褐色土層 粘性・締まりあり As-C軽石φ1~5mmを1%含みソフトロームを30%含む
- 10 明黄色土層 粘性あり・非常に硬く締まる (ハードローム)
- IV-Vは基本土層を参照



M-I セクション (東側)

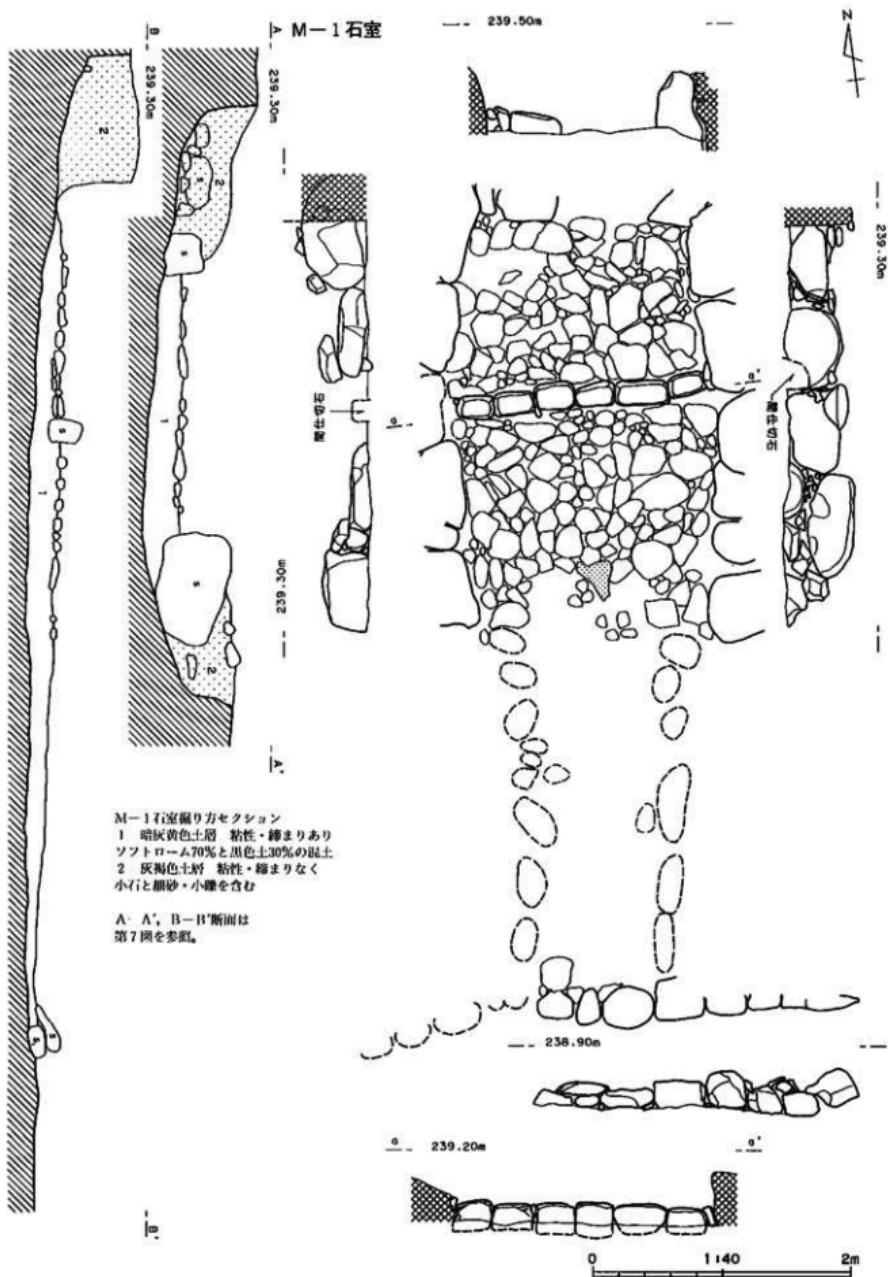
- 1 灰褐色土層 粘性ややあり・締まりあり As-C軽石をわずかに含みローム粒を1%含む
- 2 喜欽色土層 粘性ややあり・締まりあり As-C軽石を1%含みロームプロックを1%含む
- 2a 2層よりロームブロックがなく As-C軽石を5%含む
- 3 黄褐色土層 粘性ややあり・締まりあり ハードロームを10%含む
- 3a 3層より黒褐色土を多く含む (ローム30% 黑褐色土70%)
- 4 喜欽色土層 粘性・締まりあり As-C軽石5%とロームを3%含む
- 5 黑褐色土層 粘性・締まりややあり As-C軽石3%と繊維を含む
- 5a 5層にロームを5%含む
- 6 喜欽色土層 粘性なく締まりややあり As-B軽石を含む
- 7 暗灰色土層 粘性ややあり・締まりあり As-B軽石・As-C灰岩を10%含む
- 8 灰褐色土層 粘性・締まりややあり As-B軽石10%・As-C灰岩を5%含む
- 9 黑褐色土層 粘性ややあり・締まりあり As-C軽石5%とローム3%含む
- 9a 4層に鉄乳の石が入る土
- 9b 4層よりやや明るい黒褐色土層 As-C軽石を3%含む
- 10 黄褐色土層 粘性・締まりややあり ソフトロームを30%含む
- 11 暗灰黄色土層 粘性ややあり・締まりあり ソフトロームを10%含む
- IV-Vは基本土層を参照

M-I セクション (西側)

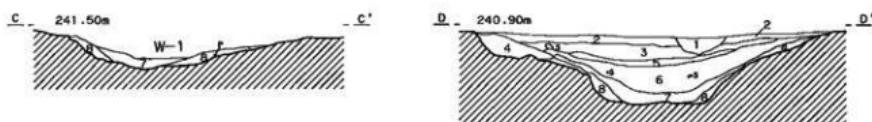
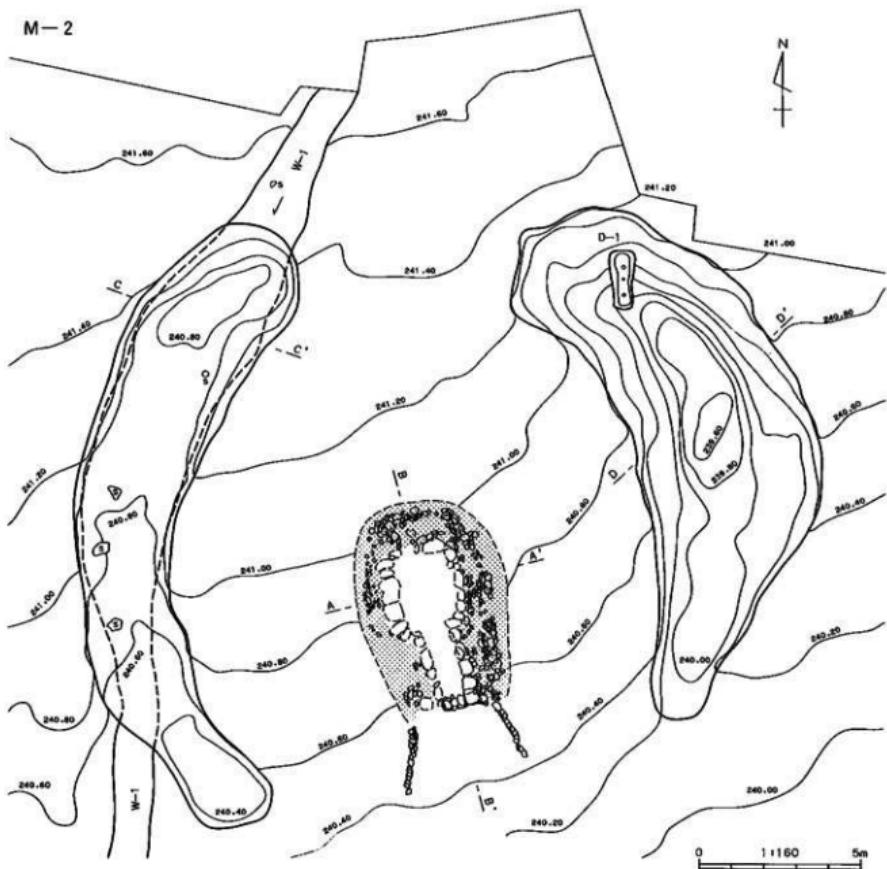
- 1 暗灰黑色土層 粘性なく締まりややあり As-C軽石3%とロームを含む
- 1a 灰褐色土層 粘性・締まりあり As-C軽石1%とロームを含む
- 2 黄褐色土層 粘性・締まりあり As-C軽石1%とローム・黒褐色土を含む
- 3 黑褐色土層 粘性ややあり・締まりあり As-C軽石を5%含みロームを1%含む
- 4 暗灰色土層 粘性なし・締まりややあり As-B軽石がわずかに混入する
- 5 喜欽色土層 粘性・締まりややあり As-C軽石φ1~5mmを1%含む
- 6 暗黄褐色土層 粘性ややあり・締まりあり 細砂φ3~10mmとロームを含む
- 7 黑褐色土層 粘性・締まりあり ロームプロックとAs-C軽石φ2~5mmをわずかに含む
- 8 黄褐色土層 粘性・締まりあり
- IV-Vは基本土層を参照



第7図 1号古墳実測図



第8圖 1号古墳石室平面・断面・展開図

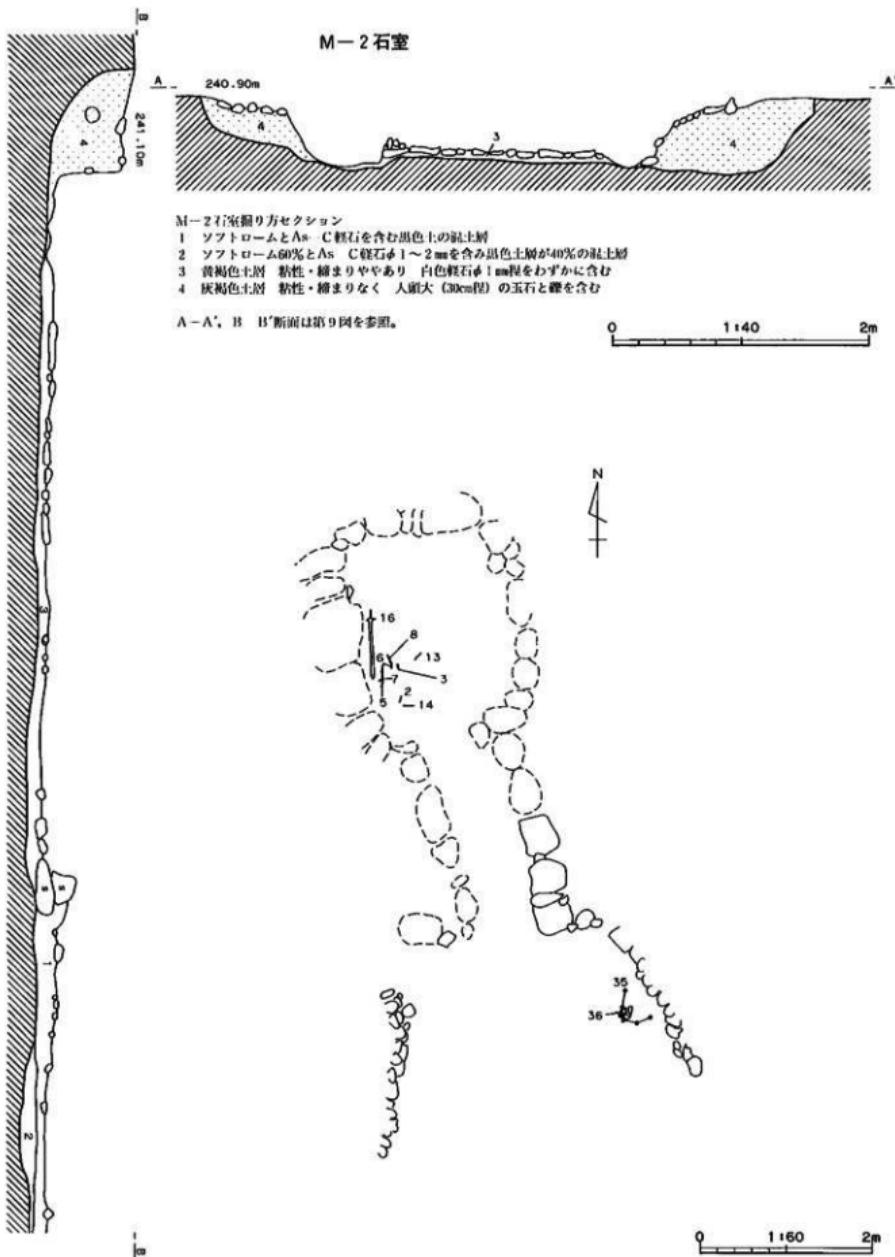


M-2 両断面セクション

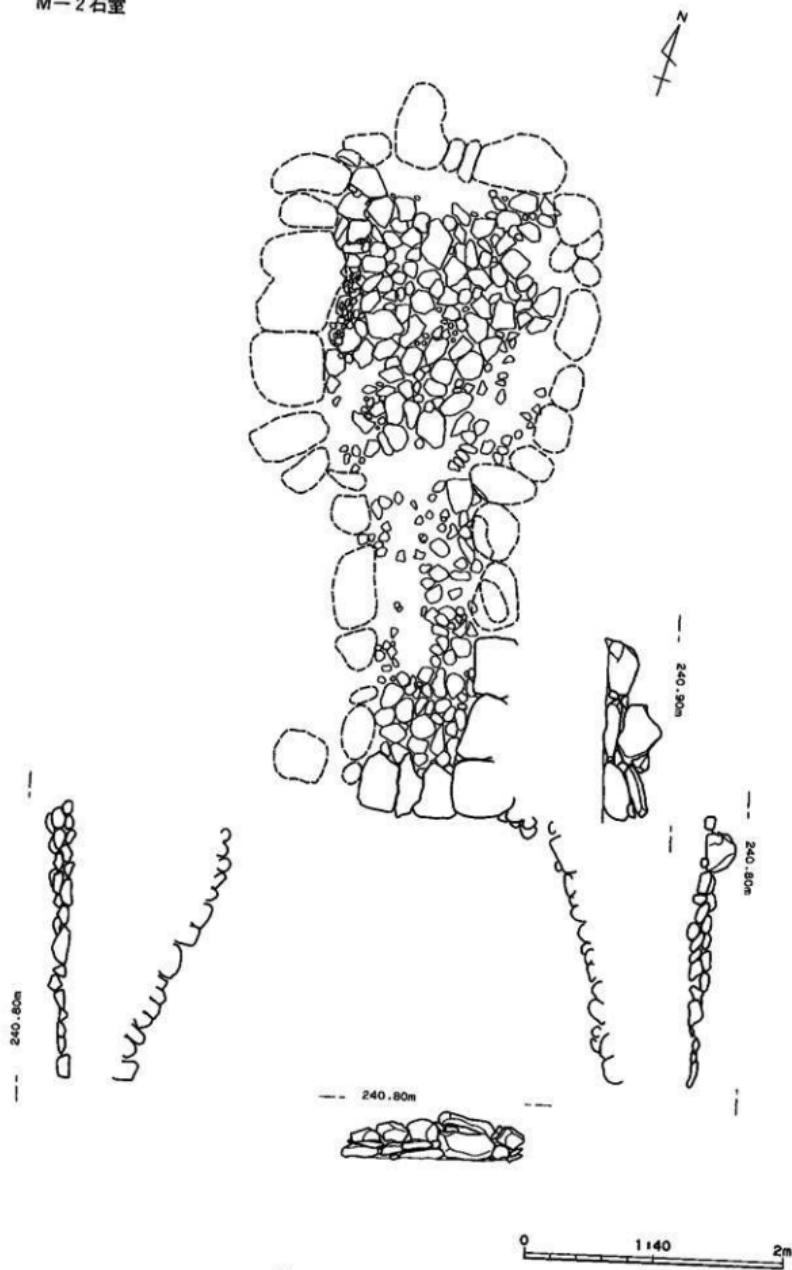
- 1 灰褐色土と黄褐色土の混土 細砂を多く含み軽石も含む
- 2 灰褐色土層 粘性なし・締まりややあり 細砂と粗石粒を含む
- 3 灰褐色土層 粘性・締まりなく 細砂を多く含み白色軽石とAs-B軽石を含む
- 4 にじむ黄褐色土層 粘性なし・締まりややあり ソフトロームと褐色土を含む
- 5 灰褐色土層 粘性・締まりなく As-B軽石50% As-B灰泥1% 喀褐色土5%と細砂を含む
- 6 黒色土層 粘性・締まりあり 白色軽石1%と小礫を所々に含む
- 7 黄褐色土層 粘性なし・締まりややあり As-C軽石1%以下と褐色土・ロームを1%含む
- 8 にじむ黄褐色土層 粘性・締まりなく 軽石粒とハードロームブロック 黒色土を1%以下含む

0 1:80 2m

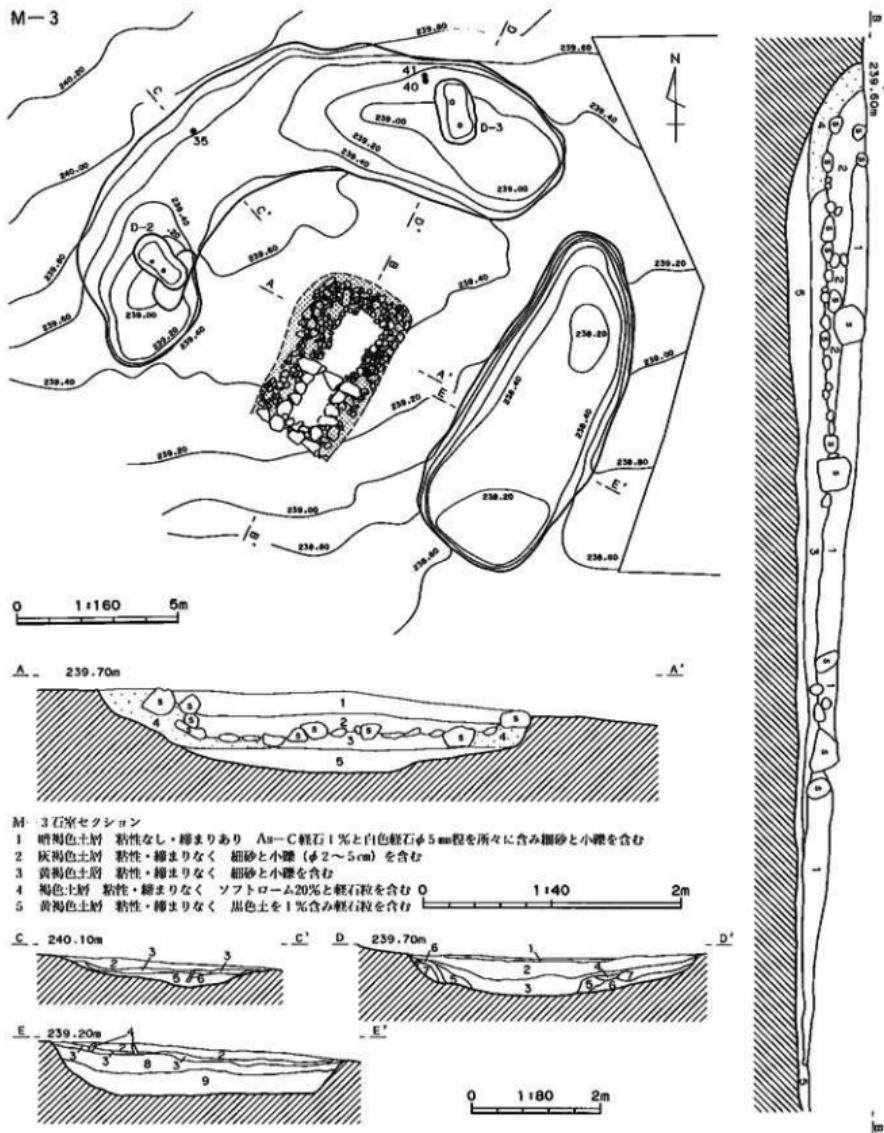
第9図 2号古墳実測図



第10図 2号古墳石室断面図・遺物接合図

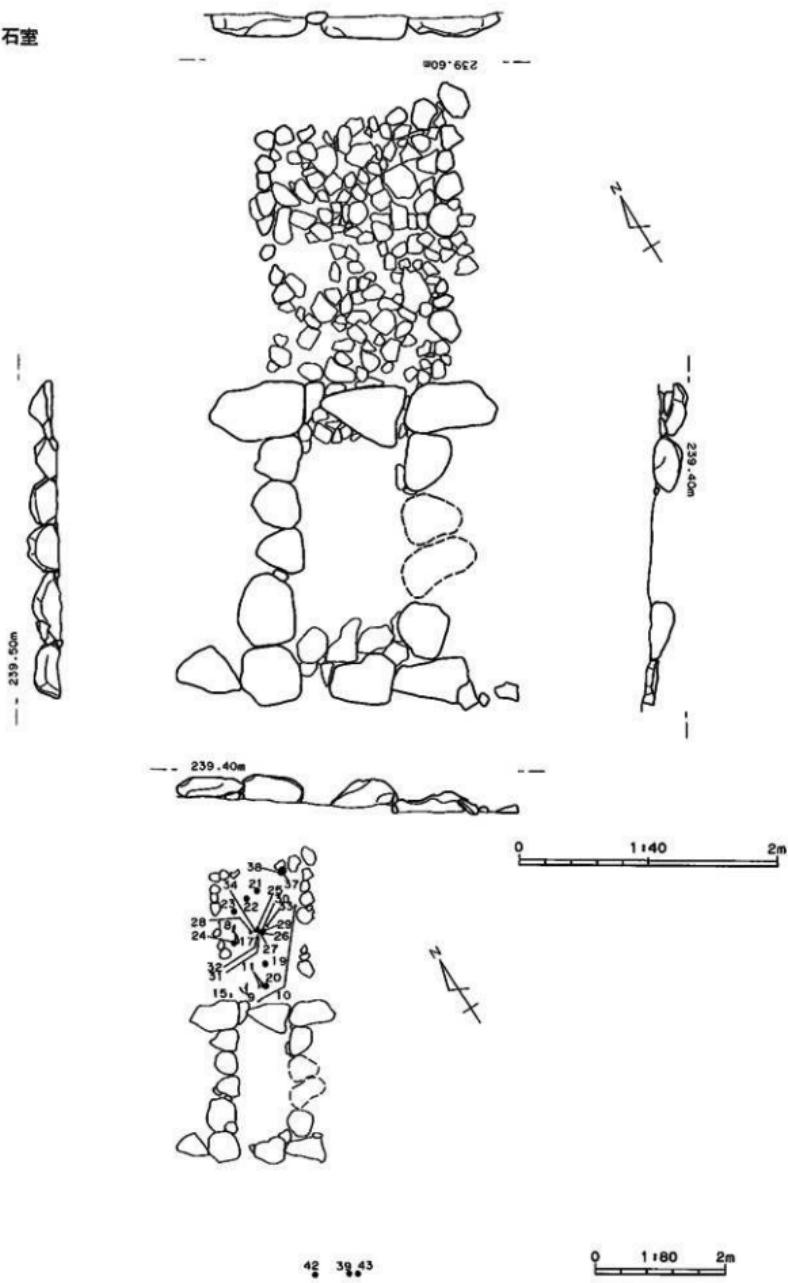


第11图 2号古墳石室展開図

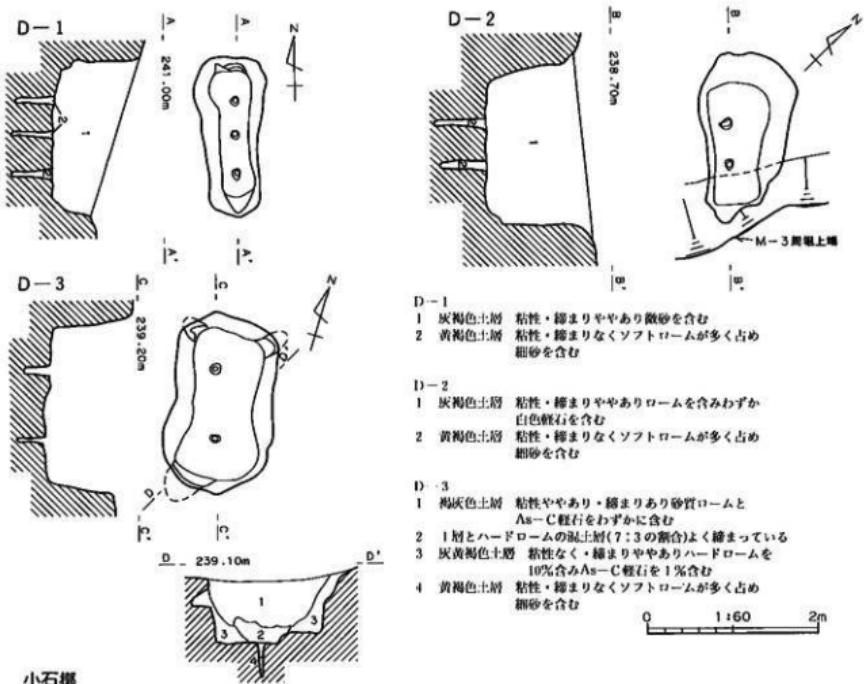


第12図 3号古墳実測図

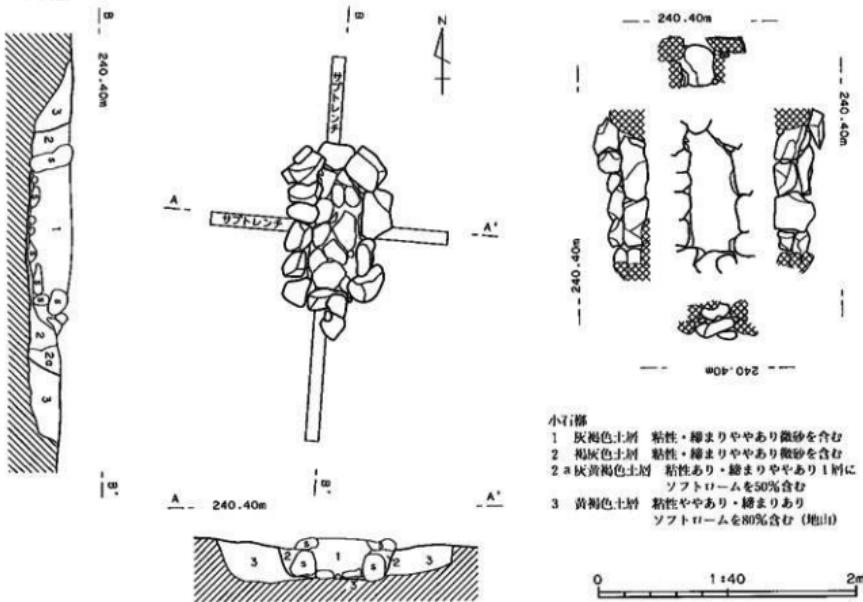
M—3 石室



第13図 3号古墳石室展開図・遺物接合図

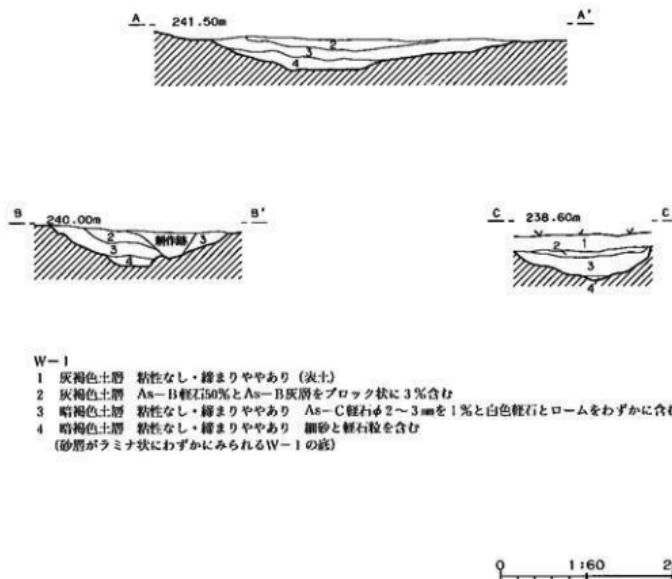


小石櫛

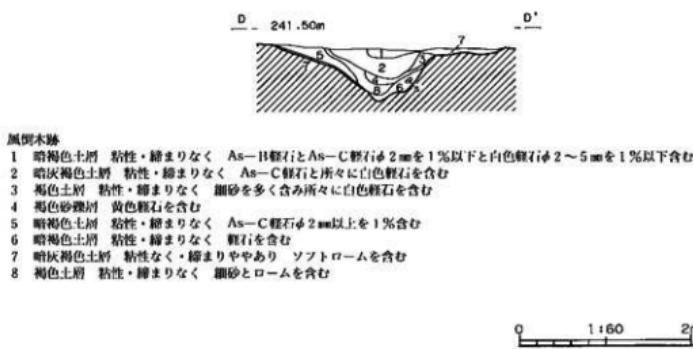


第14図 1～3号陥し穴、小石櫛実測図・小石櫛展開図

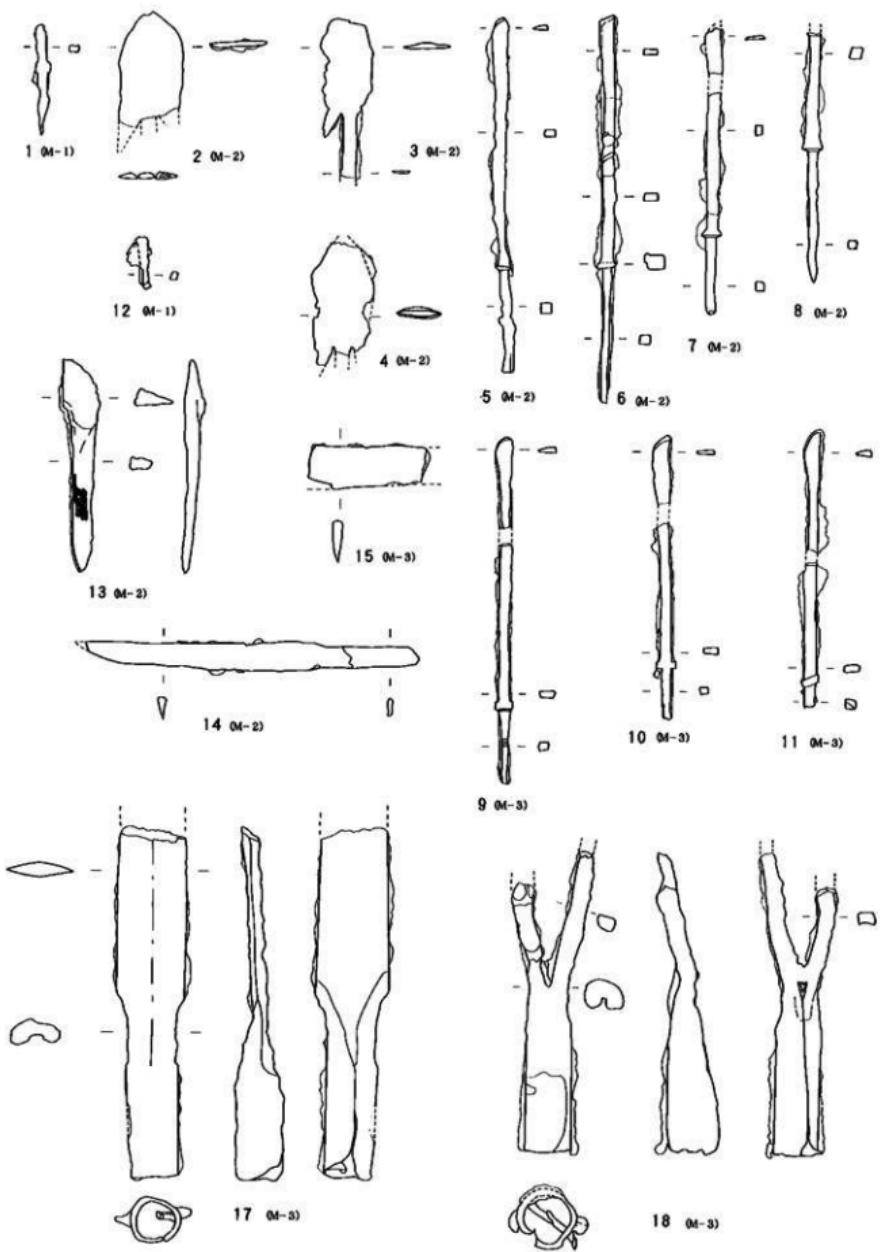
W-1 断面図



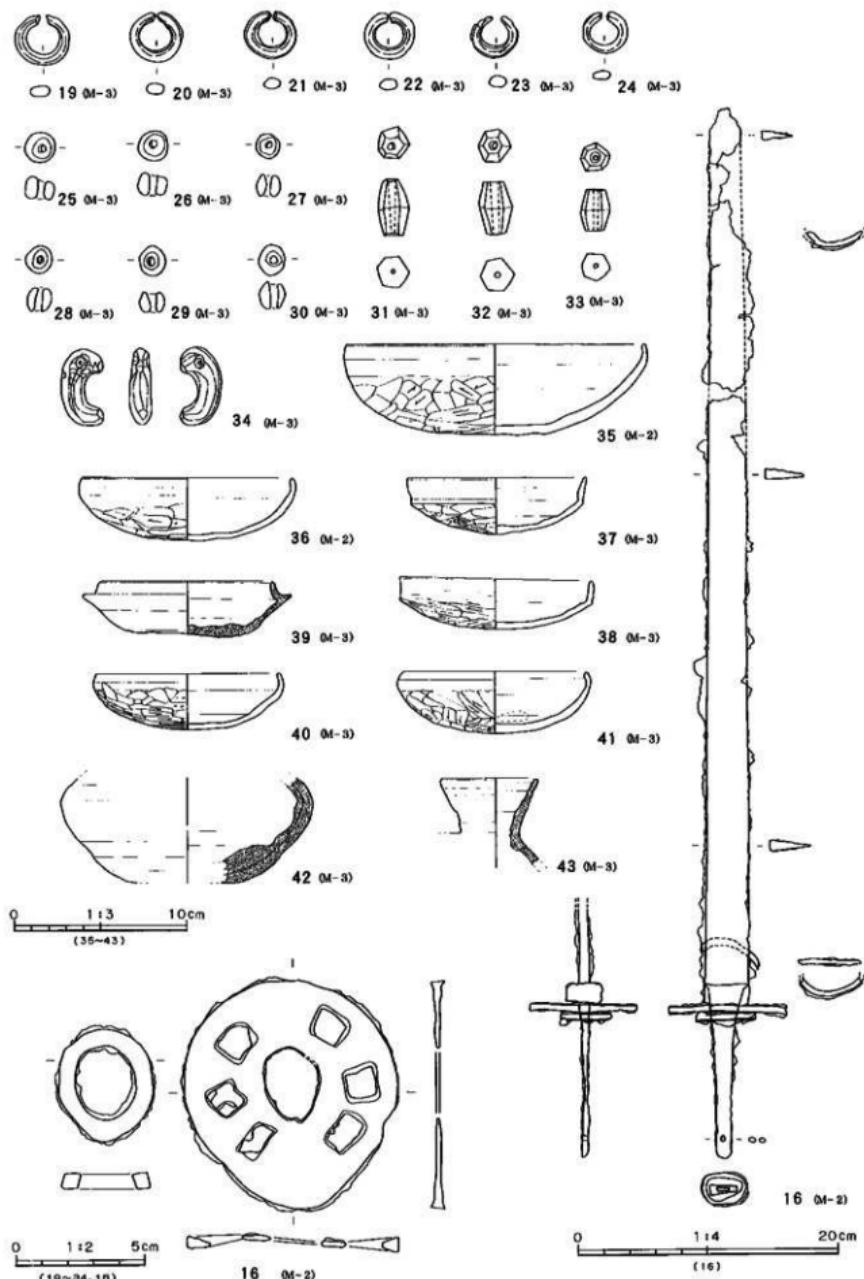
風倒木跡断面図



第15図 1号溝・風倒木跡断面図



第16図 古墳時代の遺物 (1)



第17図 古墳時代の遺物（2）

A-0
+
X 48180
Y -63520

A-5
+

A-10
+

A-15
+

F-0
+

K-0
+

P-0
+

U-0
+
X 48100
Y -63520

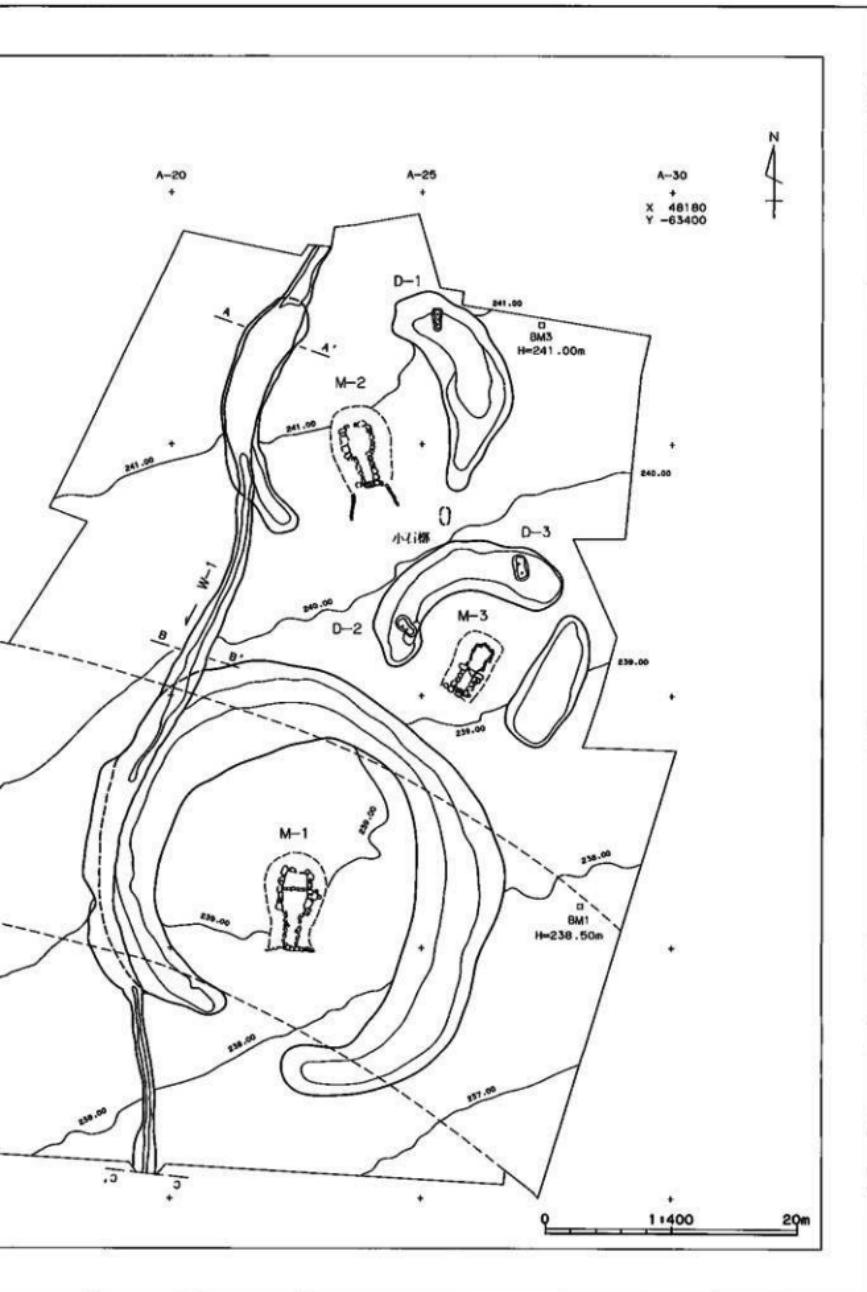
BM2
D
H=241.00m
+

O-1

D - D'

240.00

235.00



II遺跡全体平面図

写 真 図 版



油田遺跡 I・II調査前現況（東から）



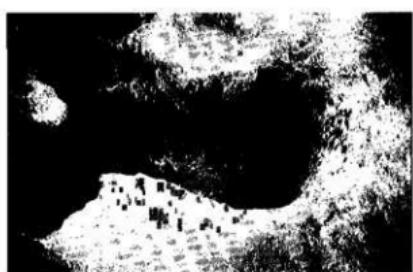
調査区II試掘トレンチ全景（東から）



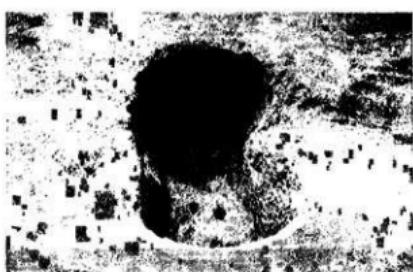
調査区IIサブトレンチ全景（北から）



D-1（薪し穴）（南から）



D-2（北から）



D-3（南から）



1号古墳全景（北東から）



1号古墳石室全景（南から）

図版 2



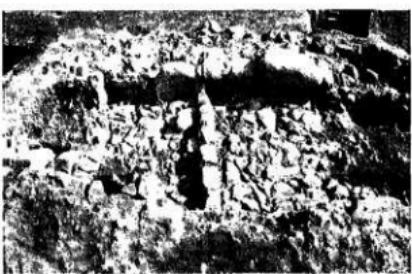
1号古墳狭門閉塞状況（南から）



1号古墳石室間仕切石列状況（西から）



1号古墳間仕切石列補強の狹み石状況



1号古墳石室敷石・間仕切石状況（西から）



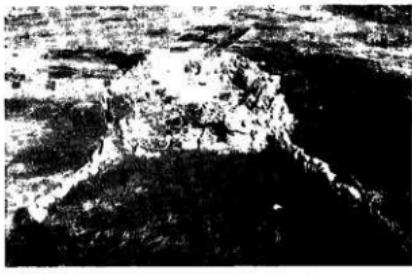
1号古墳裏込め石状況（北から）



1号古墳石室状況（南から）



2号古墳全景（南東から）



2号古墳石室全景（南東から）



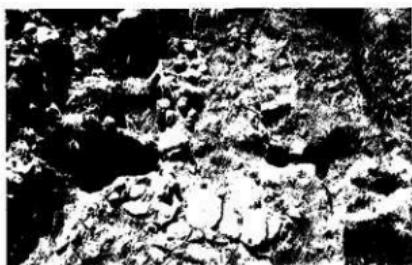
2号古墳奥門閉塞状況（西から）



2号古墳奥門閉塞状況（南西から）



2号古墳石室根石跡状況（北から）



2号古墳玄門根石跡状況（北から）



2号古墳前庭部遺物出土状況



2号古墳石室遺物出土状況（東から）



3号古墳石室全景（南西から）



3号古墳全景（南西から）

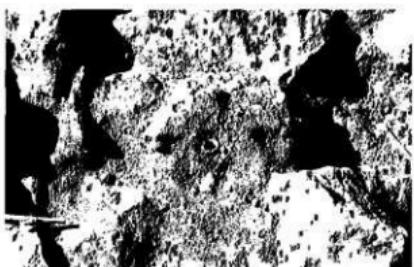
図版 4



3号古墳玄門・敷石状況（北東から）



3号古墳石室内遺物出土状況－1



3号古墳石室内遺物出土状況－2



3号古墳石室内遺物出土状況－3



3号古墳石室内遺物出土状況－4



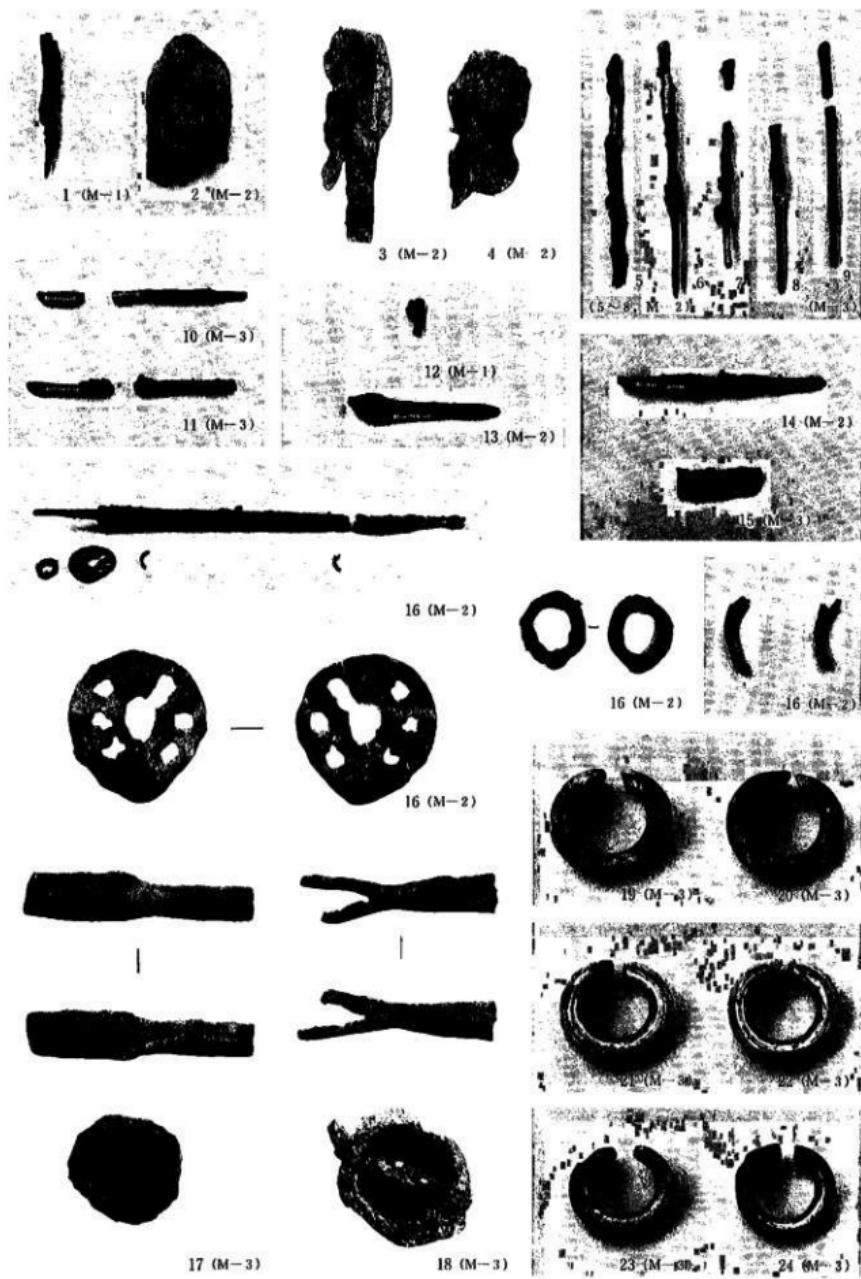
小石棚全景（東から）



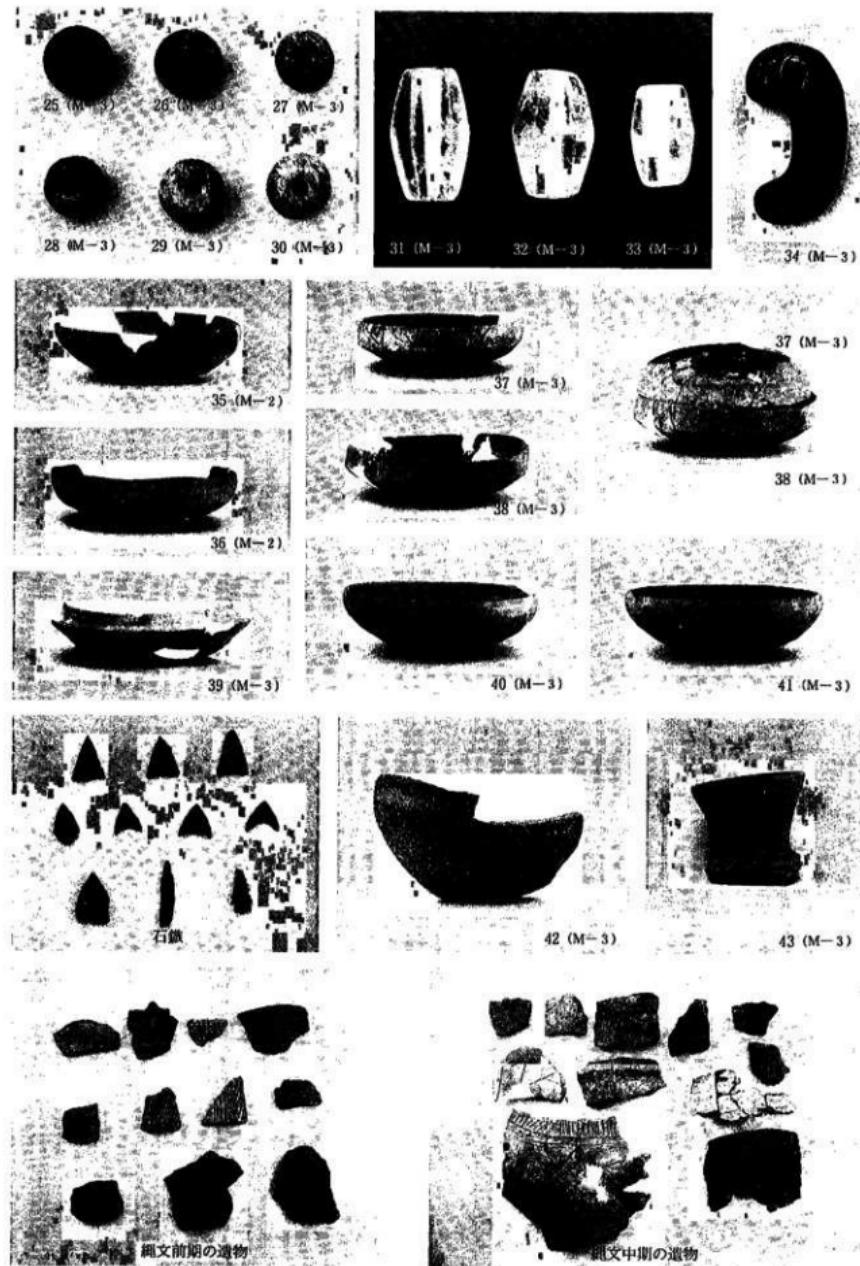
1号溝跡全景（南から）



風倒木跡全景（南西から）



図版 6



抄 錄

フリガナ	コザカシアプラダイチ・ニイセキ				
書名	小坂子油田 I・II遺跡				
副書名	公共開発(ふるさと農道緊急整備事業)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書				
巻次					
シリーズ					
編著者名	荻野博巳 (スナガ環境測設株式会社)				
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団				
編集機関所在地	〒371 群馬県前橋市上泉町664番地の4				
発行年月日	西暦1997年3月31日				

フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道路番号	北緯	東經			
小坂子油田 I 遺跡	前橋市小坂子町1252-7外	10201	8C10	36°25'55"	139°07'33"	19961121	2204.83m ²	ふるさと農道 緊急整備事業
小坂子油田 II 遺跡	前橋市小坂子町1252-2外					19970131	2577.14m ²	

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
小坂子油田 I 遺跡	墳墓	古墳時代	円墳 1基	鐵製片、土師器片・須恵器片(1号古墳)
小坂子油田 I・II 遺跡	溝跡	奈良・平安時代	溝跡 1条	土師器片
小坂子油田 II 遺跡	土坑	绳文時代	陥し穴 3基	绳文時代前期の土器片
	墳墓	古墳時代	円墳 2基	鐵製刀口・鐵錐・土師器片・須恵器片など(2号古墳) 鐵製刀片・鐵錐の一部・二叉鉢の一部・鐵錐・耳環3対(6個)・切子玉3個・勾玉1個・小玉6個・須恵器片・平瓶の一部・土師器片(3号古墳)
	墳墓	古墳時代	小石櫛 1基	なし
小坂子油田 I 遺跡	風削木跡	不 明	風削木跡 1か所	なし

小坂子油田 I・II 遺跡

1997年3月25日 印刷

1997年3月31日 発行

発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664番地の4

編集 スナガ環境測設株式会社
前橋市青柳町211番地の1

印刷 朝日印刷工業株式会社